
花と異世界人と

羽澄 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花と異世界人と

【Nコード】

N3626L

【作者名】

羽澄 炯

【あらすじ】

「生ける花が君にはよく似合うよ」

異世界からやって来て、珍しくもこちらへ留まることを選んだ彼は、そんなことを言った。俺は、まったくわけがわからなかった。

これは、異世界の日常を綴る物語の1ページ。
なんてことのないことだけれど、そこには彼らの日々がある。

彼は、異世界からやって来た。

稀にだが、確かに彼のような存在はいた。だが、“魔術”の発達した現代、帰る術もあるので、こちらに留まることを選ぶ者はほとんどいないに等しかった。たとえ、はじめは残ると言っていて、結局は帰ってしまうのだ。己につながるものが何もない世界に暮らすということが、どれほどに心細いものであるか。自分がその状況に立たされていないから想像することしかできないが、これらの例からもそれが耐え難いほどに心細いものであることがよく分かる。

だが、彼はここにいた。

ここで、暮らしていた。

「よう、ミハヤ」

「おはよう、殿下」

「おはよ」

腕いっぱい花を抱えて何をしているのかと問えば、庭師から精霊殿に飾る花をもらって来たのだと言った。

「あの頑固じいさんが了承したのか」

「こころよくね」

昔、花壇でかくれんぼしていて花を折ってしまったことがあった。そのときに落とされた拳骨の痛さは忘れることができない。かの庭師の花への愛情を知るだけに、まだ花盛りの花をこれだけ譲ってもらってきていることが信じがたかった。

「そんなにうさんくさい目で見ないでよ。特別なことなんかしてないよ。ただ、普通に頼んだだけ」

「ふうん。じゃあ、俺が頼んでもくれると思うか」

「無理だと思っ」

きぼっ、と。

即答で否定されて、呆気にとられた。

「やっぱり何かしたんだろうが」

「だからしてないってば」

「じゃあなんで俺には無理なんだ」

「だって、殿下は生きてる花に愛される人だと思うから」

「わけがわからない」

本当に、わけがわからなかった。

「そうだろうね。でも、そうとしか言い様がないんだ」

瞋を下げて困ったように言われれば、それは望むことではないので、それ以上は追求しない。

「…別に、それたちが死んでるわけじゃないだろ。まだそんなに綺麗なのに」

そばを風が通り、花らがさわり、と揺れた。

それを抱え直して、ミハヤは首を傾けた。

「そうだけど、これからは見送るばかりだよ」

短い命を使い果たして。

「おじいさんは、あの広大な庭園を仕切っている人だから、去っていく花たちをすべて見送ることがどうしてもできなくて、俺にその役目を少しだけ分けてくれたんだ」

「どうしてそれが俺にはできない」

見送るということが、具体的にどういうことか解らなかったが、聞いてみたかった。できない、と始めから言われるのはあまり良い気分のすることではない。

声音にどうしても不機嫌なものが混じる。まるで拗ねているような子供じみたものに聞こえた。

本来あるまじきものだな、とミハヤが考える素振りをするのを眺めながら思う。

「言葉が少し悪かったかもしれないね。できないんじゃない、花たちが望まない」

こちらに向けられたわけではない微笑みが、花に落ちた。

「生ける花が君にはよく似合うよ」

何の冗談だ、と笑い飛ばすことも考えた。しかし、ミハヤは本気だった。異世界出身の彼には自分とは違う何かが見えているのかもしれない。ふわりふわり、とどこか浮き世離れた、足が透けていそうな彼のことだから。

時々、本当に消えてしまいそうで心配になることがある。それは、今のように、彼を知ろうとするとき。

「お前は、どうしてその役目を己に与えるのか。」

まぶたをそつと伏せて、その言葉は彼の内からつむがれた。

「見送って欲しかったし、見送りがかったからだよ。」

少しだけ、彼の心に触れたような気がした花の咲く昼下がりのこと。

(後書き)

ほのぼのの日常系、ときどき非日常。なファンタジーを書いていけたらなあ、と思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3626/>

花と異世界人と

2011年1月27日00時09分発行